

門脈狭窄・閉塞に対する経頸静脈的経路門脈ステント留置術の有効性と安全性の検討に関する研究のお知らせ

帝京大学医学部附属病院では以下の研究を行います。

本研究は、倫理委員会の審査を受け承認された後に、関連の研究倫理指針に従って実施されるものです。

研究期間：2026年7月1日～2030年12月31日

〔研究課題〕 門脈狭窄・閉塞に対する TIPS 経路門脈ステント留置術の有効性と安全性に関する後方視的観察研究

〔研究目的〕

門脈は消化管で吸収された栄養などを肝臓へ運ぶ重要な血管です。この門脈が狭窄・閉塞すると腹水、消化管出血、意識障害(肝性脳症)などの重篤な症状が起きることがあります。最近では、IVR という治療で、狭窄した門脈の血流を改善させる「門脈再開通」「門脈ステント留置術」という治療が行われ、症状の改善が期待できることが分かってきました(IVR とは画像下治療の略で、X 線透視下や超音波ガイド下にカテーテルなどを用いて行う治療のことです)。この治療には大きく2つの方法があります。

- ① 狭窄した部分だけを広げる方法(ステントを入れるなど)
- ② ①に加えて、肝臓の中に「血液の新しい通り道(シャント)」を作って門脈の圧を下げる方法

両者とも一定の効果は報告されていますが、どの患者様にどちらを選ぶのがよいかについては、まだ明らかな結論が出ていません。また、大量腹水や凝固異常などの理由で、皮膚から肝臓へ針を刺す一般的なルート(経皮経肝アプローチ)が難しい方もいます。このような場合に、首の静脈から肝臓へ進むルートを使い、シャントは作らずに門脈のステントだけを入れる方法については、効果や安全性を評価した報告がまだありません。本研究の目的は皮膚から肝臓へ針を刺す治療が難しい患者様を対象に、首の静脈からのルートを使って門脈にステントだけを入れる方法の有効性・安全性を明らかにすることです。

〔研究意義〕 経皮経肝アプローチが困難な門脈狭窄・閉塞症に対する最適な治療戦略を構築できる可能性があると考えます。

〔対象・研究方法〕 2017年1月1日から2025年10月31日までに当院で門脈狭窄・閉塞に対して経頸静脈的経路で門脈ステント留置術を受けた患者様につき、診療録に記載されている年齢、性別、病歴や IVR 治療内容・成績などについて電子カルテから情報を取得して解析します。

〔研究機関名〕 帝京大学医学部放射線科学講座

〔個人情報の取り扱い〕 本研究で得られた個人情報は、氏名等の個人を特定するような情報を削除し、どなたのものかわからないように加工して、厳重に管理します。データ等は、帝京大学医学部放射線科学講座にある鍵のかかる保管庫で保管します。研究終了後には使用した情報は帝京大学臨床研究センターにて10年間保管の後に廃棄します。研究結果を学術雑誌や学会で発表することがありますが、個人が特定されない形で行われます。本研究についてご希望があれば、他の患者様等の個人情報及び知的財産の保護等に支障がない範囲内で、研究計画書及び研究の方法に関する資料を入手又は閲覧する事ができますので、問い合わせ先までお申し出ください。

対象となる患者様で、ご自身の検査結果などの研究への使用をご承諾いただけない場合や、研究についてより詳しい内容をお知りになりたい場合は、下記の問い合わせ先までご連絡下さい。

ご協力よろしくお願い申し上げます。

問 い 合 わ せ 先

研究責任者:氏名	近藤 浩史	帝京大学医学部放射線科学講座	職名	教授
研究分担者:氏名	平野 貴規	帝京大学医学部放射線科学講座	職名	助手
住所:	東京都板橋区加賀 2-11-1	TEL:03-3964-1211	(代表)	